# 知らない旅人　モンゴル

昔むかし、ある若者が、馬を走らせ、家に帰ろうとしていました。山を越え、谷を越えて行くうちに、もう真夜中になってしまいました。あたりは静まり返っていて、自分の馬のひづめの音のほかには、何も聞こえませんでした。

とつぜん、うしろのほうで、うなり声がしました。若者は、不思議に思って馬を止めました。ふりかえってみると、暗闇の中を、ひどく貧しい身なりをしたじいさんが、こちらへ歩いてくるのが見えました。じいさんは、

「お願いだ。あんたの馬の後ろに乗せてくれないかい。馬をなくして、もう一歩も歩けないんだよ」といいました。

若者は、じいさんをこのまま放っておいたら、きっとおおかみに食べられてしまうにちがいないと思いました。そこで、じいさんを自分の後ろに乗せてやり、

「あんたが落っこっちゃうといけないから、しっかりしばっておくよ」といって、帯で、じいさんを自分の体にしばりつけました。それから、馬を力いっぱい走らせました。

じいさんは、若者の後ろで、ひとことも声を出しませんでした。若者は、なんだか気味が悪くて、ふりかえることができませんでした。

いくつもの丘を越えて、馬を走らせていくと、やっとのことで、はるかかなたに明かりがひとつ見え、にわとりの声が聞こえて来ました。

ようやく、若者は、家に帰りつきました。家に着いて、ふりかえってみると、じいさんのすがたはなく、きつくしばった帯の中には、ぴかぴか光る白い骨が一本残っているだけでした。

原話：『世界の民話２１モンゴル・シベリア』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

再話：村上郁